

猿新聞

編集責任者
山村 準
tel:0595-63-1725
Email
jyun.y@asint.jp
名張鳥獣害問題連絡会

発行部数

【全戸回覧】

錦生地区：100部
赤目地区：150部
箕曲地区：70部
ひなち地区：60部
つつじが丘：430部

【全戸配布】

国津地区：380部
市民センター：90部
(10地区)
名張市議会：20部
名張市役所：20部

鳥獣保護法 狩猟のビジネス化

日本における狩猟の歴史は古く、農耕や牧畜が普及しない時代から今日に至るまで行われてきました。

古代人にとって、鳥獣は貴重な食糧であり、現代の猟師にも「山の幸」として、山の神からの授かり物であるという思想が残っています。

日本は中世以降に、仏教が盛んになり「殺生禁止」という教えは山村にも伝わったが、縄文時代からの狩猟の思想である「命をありがたく頂く」ことが、山村に生きる人々の思想であったと思われま

す。昨今の野生動物対策は、野生動物の保護管理という色合いが強くなり、被害を解消しながら、なおかつ野生動物・自然環境を保全するというのが主流となりつつあります。

被害防除や個体数調整の努力はもちろん必要ですが、急激な変化を避けながら、いかに森林や動物を扱ってい

ければよいのか、過去に学びながら長期的な視点で考えていくことが重要であると思います。

野生動物は捕獲する事は全て法律で禁じられていますが、例外が2つあり、一つは「狩猟鳥獣」が指定されていて一定の条件で捕獲することができると、もう一つの例外が人間に害をなすとして捕獲の許可を申請をして、許可されたものになります。

この後者の方を「有害鳥獣」と一般的に呼んで捕獲することができるといわれています。

ただし、今年鳥獣保護法の改正があり、野生動物のうち一部の動物を「管理動物」とすることにしようです。

害獣、益獣の判断は人間の都合の良い悪いで決められます。

たとえば、スズメは米の害鳥ですが、夏は芋虫をよく食べるので野菜にとっては益鳥です。害か益かは人の立

場により変わります。

1958年、毛沢東時代の中国ではスズメが「害鳥」ということで数万羽の駆除が試みられました。

1960年になると天敵がいなくなったためにイナゴが大量発生し、作物を全て食い荒らし大飢饉が発生。2000万人が死亡したと伝えられています。

人間は何度も何度もこのような愚行を繰り返しているのです。

鳥獣保護法の改正により民間の会社が、有害鳥獣捕獲ビジネスに乗り出してきています。

昔から農家と猟師は補完関係で、猟師は昔ながらの慣行と狩猟儀礼を遵守し乱獲を戒めてきた歴史があります。

狩猟がビジネスとして成立すれば、明治時代のように乱獲で絶滅の危機にさらされる野生動物が出てくるのは必至。絶滅してしまつた生物は、もう元には戻りません。

ニホンジカは乱獲・保護により激減・激増繰り返してきた長い歴史があります。現代

においてもシカ被害の深刻化が全国的に拡大しています。その要因は種々考えられますが、無計画な保護や捕獲が元凶にあると思います。

野生動物の種別や特性に合わせた対策です。シカやイノシシのよう

に現在の日本の環境では過剰に増え森林・農地への被害が甚大となる種については、

「野生動物の種別や特性に合わせた対策です。シカやイノシシのよう

に現在の日本の環境では過剰に増え森林・農地への被害が甚大となる種については、

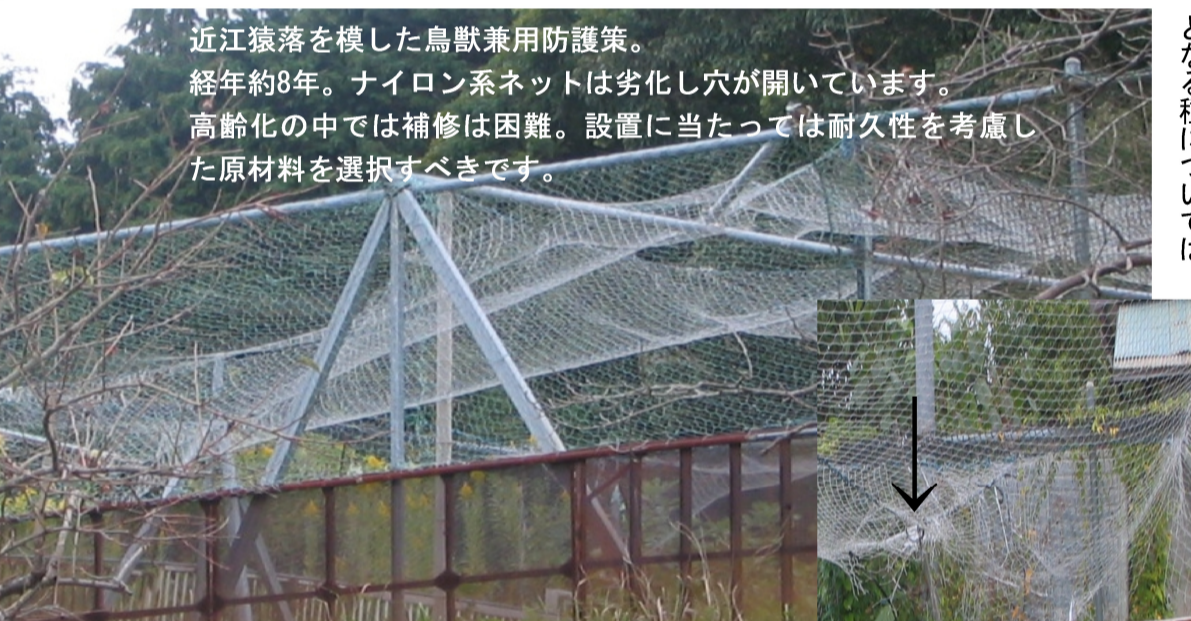
獣害対策 普遍的最善は無い

動物の「普遍的な最善」は無いと思います。環境が異なる、野生動物が相手であり、管理する側もスタンスがまちまちだからです。場所や動物、管理する人に合わせた防除方法が必要

です。

有害鳥獣の扱いについては、各道府県が策定した指針『鳥獣保護事業計画書』遵守しなければなりません。

その中で重要な概念が「防除前提の駆除」という原則。これは、防除と駆除が並列ではなく、「まず必要と思われれば防除を施す。それにもかかわらず防



近江猿落を模した鳥獣兼用防護策。経年約8年。ナイロン系ネットは劣化し穴が開いています。高齢化の中では補修は困難。設置に当たっては耐久性を考慮した原材料を選択すべきです。

人間のエゴ 春は益鳥、秋には害鳥

捕獲駆除を重視した対策がとられています。捕獲放獣（お仕置き放獣）などの非致死的措施も重要視されています。

また、サルの駆除は群れの分裂を引き起こす可能性があるのので慎重な対処が重要になってきます。

絶滅が危惧される野生動物が錯誤捕獲された場合は速やかに放獣する必要があります。

また、昨今増えた外来種のうち特に環境・生態系への悪影響が大として特定外来生物に指定された種は、捕獲駆除が主対策となっています。

このような事情から、害獣は何でも「殺せばいい」また、何でも「保護すればいい」という考え方を改める必要があります。

獣害対策は、先ず対象動物を特定することから始め、大事なことです。

動物の特性に合わせて対策は変わってきます。

物理的防除しようとしたら大変なことあります。個人では事実上不可能なこともあります。動物によって超えられる高さも違います。動物の性質や能力を知った上で対策を考えることが大事です。

施工にかけられるコストはどの程度か。コストバランスを検討し施工可能な資材を整えることが極めて重要な要素です。

資材調達に当たっては、耐用年数、物理的

強度や部材の強度なども事前に検討しておくべきです。また、高齢化の中、設置に無理のない原材料を選ぶことも大切です。

管理はどの程度まで可能か。防除柵は設置してそれで完了ではありません。電気柵を使用するのであれば漏電管理が重要な条件になります。これが十分にできないのであれば電気柵をあきらめて物理的な柵対策をとるべきです。

施行に当たっては、現地のイレギュラーな地形に対応した対策が必要。イレギュラー地形に対応する資材は販売されてはいません。「こういう場所はこうしたほうが良い」など経験者に教えを乞うのが早道でしょう。

おじろ用心棒などサル、シカ、イノシシに対応した防除柵が開発されていますが、鳥類には効果がありません。

獣害対策にはすべての野生動物に共通した対策は無いということです。

人間はものごとを理解するときに、善いか悪いか、好きか嫌いかで決めているといつてもいいと思います。

害鳥・害獣という単語は人間側の経済的観点から見たエゴの概念です。

人間側にとって害が

有るかどうかだけの意味。益鳥とは人間の生活に直接・間接に役立つ鳥、ムクドリ・ツバメなどのように害虫を捕食する鳥をいいます。

季節により益鳥が害鳥になるものもあります。スズメは春は害虫を食べる益鳥とされていますが、秋には稲を食べる害鳥となります。

ツバメは益鳥だがスズメは害鳥だ、とするのはまったくナンセンスで、時と場所によっては、ツバメによる経済的被害が生ずることは多々あります。

野生動物に対する一般的なイメージは人間側にとって害が有るかどうかだけのことで、動物側してみれば人間が害獣です。

「腐敗」と「発酵」という分け方と同じです。発酵も腐敗も同じ「細菌などの繁殖で変質すること」ですが、人に都合の善い場合は「発酵」といって都合の悪い場合は「腐敗」という使い分けをしているわけです。

人は見かけによらないとはいいますが、動物の中にも見かけによらない生態能力を持つ種が沢山います。

対策に当たっては外面だけでなく、相手の本質までしっかり把握し対策を立てることが重要です。

農業と環境破壊

獣害で悩むのは現代人だけではありません。記録によると、江戸時代から日本の農山村では獣害に悩まされ続けてきた歴史があり、絶滅寸前だったとされる朱鷺さえ、駆除対象にしていたほどです。

日本では古来、食用の家畜を育てる習慣が少なく、主に狩猟で得たシカやイノシシの肉を食していました。

奈良時代、仏教伝来以降は、獣肉全般が敬遠されるようになっていったが、日本人の間で全く食べられなくなつたという時期はみられません。明治時代あたりまで、日本で動物の絶滅があまりみられなかったのも、仏教戒律殺生禁断が大きく影響していると考えられます。

獣肉食に関する嫌悪感も時代とともに変わっていき江戸時代以降では狩猟活動は盛んに行われていました。

しかし、人類の発展の過程においては、農耕文化を抜いての日本の

繁栄は考えられません。狩猟での生活は安定的な収穫が難しく、獲物を探して移り歩く必要があります。農耕ではある程度安定的な収穫が見込め、定住もでき、農耕は見直され現代日本の一次産業の礎となつていきます。

さらに、農耕、牧畜では生産物の余つたものを、蓄えることができ、発展してきたのです。

近代以前の食糧獲得活動は採集、狩猟、農耕、牧畜との4種が考えられます。

狩猟が野生の動植物を略奪的に獲得するのに対して、農耕・牧畜は、当の動植物の生殖および成長を人的に促し、米・麦などの穀物や乳、毛や皮、肉などの産物を得ながら人間の管理の下で共生を図っていました。

だが、農耕牧畜生活では自然を切り開いての圃場造成が必要になります。江戸時代、人口の急増に伴い耕作地や牧畜に適するような土地を拡大造成するために無意識での自然破壊を犯しています。

農耕は、増え続ける人口に対応して少しずつ環境への介入を強め、長い年月をへて現代に移行してきました。

人の手による自然破壊は古代から行われていて現代においても自然破壊は止どまるとこ

ろがあります。戦後、人工林に置き換える「拡大造林」が全国的に進められ、天然林の4割以上が人工林に置き換えられました。これも大きな自然破壊だったのです。

農業は自然を相手にし、環境と調和する産業といわれきましたが、よくよく考えてみると最大の環境破壊産業ともいえます。

自然破壊は、人間が直接的に手を加えて破壊することもあれば、人間の活動によって間接的に自然環境に悪影響を及ぼすものがありますが、日本農業はこ

ろがあります。戦後、人工林に置き換える「拡大造林」が全国的に進められ、天然林の4割以上が人工林に置き換えられました。これも大きな自然破壊だったのです。

農業は自然を相手にし、環境と調和する産業といわれきましたが、よくよく考えてみると最大の環境破壊産業ともいえます。

自然破壊は、人間が直接的に手を加えて破壊することもあれば、人間の活動によって間接的に自然環境に悪影響を及ぼすものがありますが、日本農業はこ



シカ密度測定方法「糞粒法」

シカの生息密度を推定するために行われる方法の一つとして、比較的簡単に行われてきた方法として、「糞粒法」があります。早い話が、シカのウンチを数える方法です。チョコボールのようなウンチを数え、専用のプログラム（通称「糞粒プログラム」）に入力・処理することでシカの生息密度を推定することができます。

とはいえ、はじき出される生息密度は、あくまで推定値であり、実際の生息数よりも少なく評価される傾向があるとの話も耳にします。

しかし、多くの地点で実施した結果を比較することで、「どの地域が深刻なのか」「被害は目に見えていないけれど警戒しなければならない地域はどこか」といったことが分かるという点で、とても便利な方法であることは間違いありません。

(web獣害対策知恵袋より抜粋)

名張B群移動状況 平成29年9月22日～10月20日

指導員報告
B群は、9月上旬は蕨（わらび）集落周辺と上三谷、長坂周辺を遊動していました。中旬以降も同じパターンで遊動していますが、長坂、上三谷の往復パターンが多いです。子ザルが自動車に轢かれて死ぬという事故が発生しています。

☆ 編集局より
ニホンザルは、環境の変化に対応して柔軟に食性を変化させる能力を持っていて、木の実などの完熟度に応じて移動しています。ニホンザルは秋から冬は交尾期で妊娠に備えての栄養が必要です。主要食物である何種類かの果実が不作の年は出生率は大きく下がります。



名張A群移動状況 平成29年9月22日～10月20日

指導員報告
A群は、9月下旬頃は青蓮寺湖、下比奈知、比奈知湖周辺の山中で活動していました。時々目視することもありました。10月上旬では比奈知湖周辺を拠点に青蓮寺湖、兼前、つつじヶ丘周辺の山中を移動しています。10月中旬では青蓮寺湖周辺を拠点にアチコチに移動。山奥深くに入り受信不能の時もありましたが、香落 橋付近では目視された報告もあります。A・B群とも、山中の木の実などの完熟度に応じて移動しているように見受けられます。

